

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる¹⁾

渡 邊 千 秋*

はじめに

2013-14 年には「日本スペイン交流 400 周年」を記念して、日本・スペイン両国においてさまざまな文化事業が開催された²⁾。その一環として、2013 年 12 月 12・13 日の両日に、在日スペイン大使館および東京国立近代美術館フィルムセンターの協力のもとで、映画室新白羊宮が主宰して『殉教血史日本二十六聖人』³⁾ という日本映画の映写会がもたれた⁴⁾。1931 年 10 月に日本で初公開されたこの映画は、実はスペインの映画史上初めて公開された日本映画でもある

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

- 1) 本稿執筆にあたっては、文中で言及するドメンザイン神父と 1949-50 年にかけて働いた経験をおもちのトマス・エセイサバレナ神父(イエズス会)にドメンザイン神父について情報をご提供・ご教示いただいた。ここに心より感謝を申し上げたい。
- 2) 慶長遣欧使節団派遣 400 年を記念する年に、日本とスペインの相互理解の促進と二国間関係の新たな展望を拓く契機とすることを目的として一連の事業が開催された。既にこの事業は終了しているが、公式ホームページは消去されていない。事業詳細については、以下の URL を参照されたい。<http://www.esja400.com/jpn/> なお、本稿における全ての URL の最終閲覧日は 2015 年 1 月 27 日である。
- 3) 原タイトルには「廿六」といった旧仮名遣いの表記がみられるが、本稿では現代仮名遣いで表記する。またこれ以降、その他の資料の旧仮名遣いについても同様に現代仮名遣いで表記するものとする。
- 4) 東京都中央区銀座 8 丁目 3 番地、国映株式会社 TCC 試写室にて開催。なお上映当日の会場での配布物だったものは、以下の URL で入手可能である。<http://www.exteriores.gob.es/Embajadas/TOKIO/ja/Noticias/Documents/%E6%98%A0%E7%94%BB%E5%AE%A4.pdf>

とされる⁵⁾。タイトルから推測できるように、この映画は豊臣秀吉による切支丹弾圧にあってもそれに屈せず、長崎まで引き回された末に殺害された16世紀末のカトリック信徒の姿を描いたものである⁶⁾。1930年代初頭の日活が総力を注いだとされるこの映画は、実は平山政十という一人のカトリック信徒が自己資金を投入して作り上げたものでもあった⁷⁾。当時としては珍しくイタリアでの現地撮映によるシーンもあり、製作費30万円・撮影には半年をかけたとされる⁸⁾。監督・脚本は池田富保⁹⁾、撮影は酒井宏が担当した¹⁰⁾。俳優陣には特別出演として片岡千恵蔵をむかえ¹¹⁾、主役を務めた山本嘉一をはじめとして¹²⁾、澤田清¹³⁾、三栞豊¹⁴⁾、南部章三¹⁵⁾、伏見直江¹⁶⁾、山田五十鈴¹⁷⁾と、当時の日活京

5) 配布物にはスペインにおける初上映がいつ、どこで行われたかについての言及はみられない。http://www.exteriores.gob.es/Embajadas/TOKIO/ja/Noticias/Paginas/Articulos/20131126_NOT1.aspx

6) 日本二十六聖人に関しては、キリシタン研究のなかで既に深い研究蓄積がある。殉教当時のフランシスコ会寄りの視点で残されたジェロニモ・デ・イエスの記録の日本語訳は、既に1950年代に出版されている。これについては、以下の文献を参考にされたい。佐久間正「西班牙古文書日本二十六聖人殉教録(ジェロニモ・デ・イエス書翰並びに報告)」『横浜市立大学紀要』26号, 1954年。また、長年にわたり日本二十六聖人記念館館長を務められた結城了悟神父(1922-2008年)の功績については、たとえば以下の文献を参照されたい。以下の文献を参照されたい。結城了悟『二十六聖人と長崎物語』聖母文庫, 2003年。結城了悟「サン・フェリーベ号漂着と二十六聖人の殉教」サン・フェリーベ号浦戸漂着400年実行委員会編『運命の船サン・フェリーベ号』南の風社, 1998年, pp. 19-36ほか。また結城神父はルイス・フロイスがローマに送った二十六聖人の殉教報告書の日本語への翻訳者でもある。

7) 山梨淳「映画『殉教血史日本二十六聖人』と平山政十: 1930年代前半期日本カトリック教会の文化事業」『日本研究』41号, 2012年, p. 179。平山は長崎浦上の隠れキリシタンの家系に生まれた人物で、平城(ソウル)で事業に成功し、後に紫綬褒章を授与された。

8) <http://www.nikkatsu.com/movie/12980.html>

9) 大正末期から昭和初期における日活で「百萬弗映画」を撮る監督として名をはせた人物である。また『日活40年史』に掲載されている「日活映画作品目録」では、本作は昭和6年太秦作品の時代劇部、池田富保監督作品の筆頭に挙げられている。日活株式会社編『日活40年史』大日本印刷, 1952年, p. 195。

10) 当時の映画評論家のあいだでも、酒井の撮影技術は高く評価されている。「映画評」『朝日新聞』朝刊, 1931年10月3日, p. 10。

11) 片岡はフランシスコ大工伝吉役。

12) 山本は、スペイン出身のフランシスコ会士、ペトロ・パプチスタ神父を演じた。

13) ヨハネ諏訪野正道役。

14) ゴンサロ・ガルシア神弟(ブラザー)役。

15) 細川忠興役。

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる都撮影所で既に人気を博し、将来的には日本映画界を代表するようになる俳優陣を配している。また、中村英雄¹⁸⁾、中村政登志¹⁹⁾、尾上助三郎²⁰⁾などを子役として起用したことで注目も浴びた²¹⁾。封切り当時の新聞広告には「日活巨大作国際豪華編」「日本歴史の一頁を飾る秘録」「空前のスケールを以って公開」などの宣伝文句が躍る²²⁾。15000人²³⁾という大群衆による場面をも採用したこの作品は、「日本近代のカトリック史でも過去に例を見ないスケールの大きな文化事業であった」²⁴⁾と評価されている。

平山は、当時悪化しつつあった日本の対外イメージを改善するための国策的宣伝活動を意識し、日本以外の国での上映を目指した²⁵⁾。たとえば、アメリカ合衆国では配給契約を結ぶことはできなかったが、結果的に各地の教会関係者との交渉を経て、巡業形式での上映会が開かれた²⁶⁾。メキシコでは1931年に上映され²⁷⁾、その折には、メキシコのカトリック信徒によって、長崎市立山にメキシコの殉教者の名を冠した教会を建設するのを補助する目的での募金が行われた²⁸⁾。

その一方で、メキシコと同様に観客層にはスペイン語話者が見込まれ、また二十六聖人のうちこの映画で主演として位置づけられたフランシスコ会士ペトロ・パプチスタを含む4名がスペイン出身者であったにもかかわらず、1930年代のスペインでは、この映画が上映されることはなかった。1930年代前半、プ

16) 細川ガラシヤを演じた。1927年日活に移籍済み。

17) 侍女マダレナ桜木役。なお山田は1930年に日活に入社したばかりであった。

18) ルドビコ茨木役。

19) トマス小崎彦太郎役。

20) アントニヨ役。

21) 「映画評」『朝日新聞』朝刊、1931年10月3日、p.10。

22) 『読売新聞』朝刊、1931年9月28日、p.3; 同朝刊1931年10月1日、p.1。

23) 日活提示の数値による。日活株式会社編、前掲書、p.97。

24) 山梨淳、前掲論文、2012年、p.206

25) 同上、p.180。

26) 同上、p.201。

27) 映画がメキシコで上映された理由には、日本二十六聖人のうちの1名、フランシスコ会士フィリップ・デ・ヘススがメキシコ出身者であり、「初めてのメキシコの殉教者」として知られる人物であることも影響していると考えられる。

28) “Un templo protomártir de México en Tierra japonesa”, *Signo*, n.47, 11 junio 1939, p.2.

ロデューサーの平山がベルギーを拠点として上映のための宣伝活動に力を注いだにもかかわらず、上映の契約締結は難航した。結果として、この映画は、スペインはもとよりヨーロッパでは大々的に脚光を浴びることはなかったようである²⁹⁾。

しかし1940年12月になって、この映画はスペインで改めて日の目を見ることとなったのである。いったいなぜそのような一見「ずれた」タイミングでこの日本映画がスペインで上映されたのだろうか。本稿では、この上映というできごとを時代の文脈のなかで再考してみたいと思う。

ヨーロッパでの日本二十六聖人および本作品の受容について

映画で扱われている日本二十六聖人は、豊臣秀吉の弾圧強化により京都・大阪で捕縛されたフランシスコ会とイエズス会の司祭・修道士や信徒であり、見せしめに長崎まで引き回されたのち、1597年2月に長崎・西坂の丘で処刑された者たちを指す。そのなかにはスペインやメキシコ、インドなどの出身者も含まれていた。彼らの殉教の様子は日本副管区長付のイエズス会士ルイス・フロイスによって記録され、ローマのイエズス会総長宛の報告書を通じてヨーロッパに伝達された³⁰⁾。迫害を受けて処刑されたこの二十六人は、その死から30年後の1627年に時の教皇ウルバヌス8世によって列福され、1862年6月8日には教皇ピウス9世によって列聖された³¹⁾。なお、日本二十六聖人列聖及び日本再宣教開始150周年にあたる2012年には、その意義を振り返るよう呼びかける文書が日本カトリック列聖列福特別委員会名で出されるほどであり、歴史的な様相においても現代的な意味でも、カトリック信徒の模範とされる存在である³²⁾。

29) 山梨淳，前掲論文，2012年，p. 204.

30) フロイス，ルイス（結城了悟訳）『日本二十六聖人殉教記』長崎，聖母の騎士社，2009年。

31) 日本二十六聖人記念館ホームページによれば，列聖にあたっては，列聖式が行われた1862年6月8日にはイエズス会士3名が含まれておらず，6月10日になって26名が合わせて列聖されたことが発表されたという。<http://www.26martyrs.com/index.html>

32) <http://www.cbcej.catholic.jp/jpn/doc/cbcej/120123.htm> 当時の教皇ベネディクト16世によって，2012年を「信仰年」とする旨，宣言されている。

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐって

映画では、山本嘉一が迫害を耐え抜くスペイン出身のフランシスコ会士ペトロ・バプチスタを熱演したのをはじめとして、主要な役を日本人が演じている。本作の製作時は、無声映画から発声映画への移行期にあっていた。当初サイレント版として撮影されたのであるが、平山の手で後に音声処理を施されたため、現在ではサイレント版・トーキー版の複数の版が存在するようである³³⁾。プロデューサーであった平山は、日本国内向けには日本人信徒の殉教の史実を描くことを通じて、カトリック信徒は日本国民の優れた精神を引き継ぐ愛国者であることを示し、日本国外の観客に対しては、キリストを信じる者は欧米諸国と同様に日本にも存在するのだと紹介することで、日本の対外的イメージを向上させることを目指した³⁴⁾。

しかしながら、日本以外ではこの映画が広く受容されたとはいえない。その原因のひとつは、この作品が日本から発信された「宗教もの」であったことにあると思われる。平山の意図が裏目に出た、ともいえよう。たとえば、1930年代当時のヨーロッパの人々にとって、400年以上も前の極東地域でおきた殉教事件は、進んで情報を手に入れたと思うものでも、興味を広くかきたてられる事象ともいいがたいものであっただろう。くわえて、日本の映画評論家は、「山本嘉一のバプチスタ神父としてのふん装の妙、演技の完全さ」³⁵⁾「嘉一のメエキアツプの巧さは定評があるが、今度の『日本二十六聖人』の主人公ペトロ・バプチスタ神父では正に完全にまで達した」³⁶⁾と、山本の演じた「スペイン」出身のペトロ・バプチスタ神父を概ね好意的に評しているが、16世紀当時の迫害と殉教の重みをヨーロッパの人々が眼に浮かべるための視覚的効果という点からいえば、やはり東アジア系の容貌の者が外国人宣教師を演ずることは、見るものの心になんとも不思議な感覚を呼びおこしたに違いあるまい。プロデューサー平山政十の真の意図は、命を懸けてすべてに挑む信徒の集団を生み出すことのできるカトリック教会は、日本の国益のために非常に有益な団体で

33) 山梨淳, 前掲論文, 2012年, p. 206.

34) 同上, p. 180.

35) 「映画評」『朝日新聞』朝刊, 1931年10月3日, p. 10.

36) 『読売新聞』朝刊, 1931年10月1日, p. 11.

あることを喧伝することであり、殉教事件を正確に伝えるということとは別のところにあったとはいえ³⁷⁾、なにせよ当時の観客が平山のメッセージを彼の意図に沿うかたちで映画に託されたメッセージを読み解いたとは考えにくい。

実際のところ、この作品は、平山自身がベルギーに滞在し、ヨーロッパ各言語版の音声解説つきフィルムを製作したうえで入念な宣伝活動に身を呈したにもかかわらず、1930年代のヨーロッパで広く受容されることはなかったようである³⁸⁾。とすれば、この映画が日本での公開から10年近くの時を経て、ヨーロッパの辺境であるスペインで上映されたことには、なんらかの理由があったと考えるべきであろう。そこで映画のスペインでの上映にあたって重要な役割を果たした人物として、一人の「知日派」スペイン人の存在が浮かんでくる。

スペインでの上映を促したエージェント、イエズス会宣教師ドメンザイン

日本で映画が公開された頃のスペインでは、第二共和政期(1931-1936年)をむかえ、カトリック教会の存在理由を揺るがす一連の反教権主義的政策が展開されていた。たとえば1931年12月に発布された第二共和国憲法は、第3条で「スペイン国家は公的宗教を有しない」と規定した。この条項を国家の宗教政策の根底にすえたうえで、第二共和政期には、イエズス会の国外追放やその他の修道会の教育・経済活動への従事禁止などといった政策が次々と打ち出された。国家はカトリック教会を管理し、国政の宗教的中立を維持しようと努めたのだった³⁹⁾。1931年5月におきた教会関連建造物の焼き討ち事件に代表されるように、民衆的な反教権主義の発露ともいえるカトリック教会施設や関係者に対する暴力的行為も激化するいっぽうであった。よって、実は1932年には映画『殉教血史日本二十六聖人』が日本で封切りされた模様がスペインに伝達されては

37) 山梨淳, 前掲論文, 2012年, pp.185-187.

38) 同上, p. 204. ベルギー滞在末期には、平山は日本国外務省や当時の首相、斎藤実から援助を受けていたとされる。なお斎藤は首相就任以前に朝鮮総督を2期務めた人物でもある。

39) Librería Miguel Hernández (ed.): *Constitución de la República Española 1931*, Madrid, García Rico, 1993, p. 1.

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる
いたのだが⁴⁰⁾、殉教者をカトリックの護教論的な視野から描いたこの映画が第
二共和政期のスペインで上映される可能性は限りなく低かったのである。

ところで、スペインでこの映画が上映された1940年といえば、1939年4月
1日、フランコが勝利宣言を出し、スペイン内戦が一応の決着をみてまだ間も
ない時期である。フランコ独裁体制のもとで、内戦で疲弊した国家がその再起
を目指していた時期に当たり、国民のモラルを再構築するために、政権側から
はカトリック教会に強い期待が寄せられていた時期でもある。またフランコ体
制初期には特に、内戦での死者を殉教者として尊び祀る風潮が色濃くみられた。
しかしここでいう殉教者とは、純粹に宗教的な意味での殉教者ではなく、独裁
体制の唯一党であり、イタリアのファシスト党に影響を受けたといわれるファ
ランヘ党が、自党ゆかりの戦没者を殉教者と呼んだことに象徴的なように、ファ
シスト的な思考とキリスト教とが融合した独特の雰囲気の中で使用され、特
殊な意味を内包することばなのであった。そのような時機に、殉教をテーマと
したカトリック的な日本映画がマドリードで上映される運びとなったことは考
慮するに値する事件であろう。

スペインでの映画上映を積極的に後押ししたのは、イエズス会士モイセス・
ドメンザイン・ヤルノス神父であった⁴¹⁾。1900年生まれのだメンザイン神父
は、スペイン・ナバラ地方パンプローナの出身で、コミーリヤス大学で学んだ
後、司祭に叙階された⁴²⁾。在俗聖職者としてパンプローナを中心に司牧活動を
行い、1928年には、スペイン在俗聖職者布教連合長であるビトリア司教区のム

40) “Ecos y noticias”, en *La Vanguardia*, 16 enero 1932, p. 10. 記事は1931年10月13日の名古屋での上映開始について触れている。映画が、異教徒が演じているにもかかわらず評判がよいこと、観客が感極まって涙するほど良いできであることが述べられている。

41) 本稿では以下、彼が日本で呼ばれていたとおりの呼び名にしたがってドメンザイン神父と表記する。スペイン語での発音は「ドメンサイン」に近いが、英語に慣れた日本人はZを濁音で発音するためであろうか、彼の名字は人々に「ドメンザイン」と発音され、彼自身、その状況を受け入れていた。

42) Juan RUIZ DE MEDINA: “Moisés Domenzain Yarnos”, en Charles E. O’NEILL, Joaquín María DOMINGUEZ (eds.): *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús. Biográfico-Temático*. Vol. 2, Roma, Institutum Historicum SI y Madrid, UPCO, 2001, p. 1137.

ヒカ司教のもとで、カタルーニャ地方バルセロナでの全国布教大会開催のための実務に奔走した⁴³⁾。その後、実際に国外で活動する宣教師となることを望み、1931年、31歳にしてベルギーでイエズス会に入会した。この年齢からいってイエズス会士としてはいわば「遅咲き」であり、「レア・ケース」であるともいえる。

イエズス会士となるための人格的訓練を受けたのち、1936年9月ドメンザイン神父は日本に到着した。上智大学で日本語をひととおり学習したのち、山口県に派遣され、宣教・司牧活動にあたった。1936年から38年にかけて下関と岡山のカトリック教会に赴任して助任司祭を務め、山口カトリック教会では主任司祭に任じられた⁴⁴⁾。その後、山口でフランシスコ・ザビエルを記念する聖堂の建築が計画されたため、ドメンザイン神父は資金集めの目的で1940年7月スペインへと一時帰国を果たした⁴⁵⁾。この帰国をつうじて、ドメンザイン神父はスペインに日本という国を紹介するさまざまな事業に協力した⁴⁶⁾。彼にとって映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映は、日本の精神文化をスペインに紹介するための方法のひとつであった。ドメンザイン神父の心のなかに、二十六聖人殉教者へのシンパシーがあったことは確かだ。また、ドメンザイン神父自身が受けた「迫害」をも指摘しておかねばなるまい。彼は、第二共和政期のスペインで追放されてしまったイエズス会に入会するために、ベルギーに移動しなくてはならなかったという経験を持つ。くわえて、内戦勃発直後のスペインから逃れ、1936年9月に日本に到着した人物でもある。長年希望していた外国での宣教・司牧活動を行う機会がやっと巡ってきたのは、彼にとって大きな喜びであったに違いあるまい。しかしその代償として、彼は祖国でおきた内戦の

43) “Vida religiosa” en *La Vanguardia*, 25 agosto 1928, p. 9.

44) Juan RUIZ DE MEDINA: *op. cit.*

45) 山口カトリック教会・ドメンザイン神父生誕100年記念事業実行委員会編『ドメンザイン神父』海田印刷有限公司、2002年、p. 103。なお、山口でのドメンザイン神父の後任となったのは、のちのイエズス会第28代総長となるペドロ・アルーベ神父であった。

46) 同書、p. 104。たとえば1941年4月にマドリードにあるスペイン国立図書館などを会場に開催された宣教博覧会に積極的に協力した。

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐってゆくえをはるか遠くの日本の地で知ることとなった。またスペイン内戦では多くのカトリック聖職者が殺害されている⁴⁷⁾。ドメンザイン神父自身、内戦勃発直後に夏季休暇を過ごしていた故郷バンブローナからフランス国境のバイヨンヌへと向かい、その後イタリアからドイツ船で海路日本へと旅立ったのであった⁴⁸⁾。一つ間違えば死と隣り合わせの日々を送っていたかもしれない、と彼が考えたであろうことは想像に難くない。だからであろうか、ドメンザイン神父は、反教権主義的暴力から教会を「救った」フランコ陣営側の「正義」への共感をも示している。たとえばドメンザイン神父は、1936年7月の軍部によるクーデタを「栄光のモビミエト (el Glorioso Movimiento)」と評価していた⁴⁹⁾。ドメンザイン神父が内戦の勝者フランコにシンパシーを感じていたことは、たとえば、1940年の帰国の折に、清泉寮学院の女学生がフランコ將軍の娘カルメンシータのためにそろえた人形や羽子板などのプレゼントを自ら率先して運んだことに端的にあらわれている⁵⁰⁾。その後、日本が太平洋戦争へ突入したこともあって、ドメンザイン神父はスペインに在留することを余儀なくされた。その後1947年に日本に再渡航したのちには、フランコ將軍から贈呈されたバイクに乗っていたという証言もある⁵¹⁾。

このような背景をもつドメンザイン神父は、フランコ陣営の内戦下での死者を「殉教者」と考え、スペインを護るためにこの世での生命を失った者たちを称えようとする当時の社会心性が必要とするものを読みとろうとした。そしてその精神に合致するはずと期待しながら、『殉教血史日本二十六聖人』のスペインでの上映のために協力したのであろう。くわえて、もうひとつの間接的な要

47) その多くは共和国陣営によって殺害されたとされるが、フランコ陣営側も聖職者の殺害を行った。バスク地方での例がよく知られている。

48) Moisés DOMENZAIN: “Cartas de un frente a otro frente. Rutas de Imperio. Desde Japón”, en *Signo. Órgano de la Juventud de Acción Católica*, núm.27, 19 junio 1938, p. 3.

49) Ibid.

50) 『朝日新聞』夕刊、1940年7月30日、p. 2。なお清泉寮学院は現在の清泉女子大学の前身である。

51) 『ドメンザイン神父』 p. 14.

因として、1866年から1932年まで日本での宣教に努めたパリ外国宣教会のエメ・ヴィリヨン神父への深い尊敬の念があったことにも触れておきたい。ヴィリヨン神父は、イエズス会のホイヴェルス神父が映画『殉教血史日本二十六聖人』の原作を書くにあたって種本とした書籍『鮮血遺書』を遺した人物である。ドメンザイン神父は、ヴィリヨン神父の日本での宣教活動の体験等を綴ったフランス語の書籍を、1936年に自らが来日する以前に既にスペイン語に翻訳・出版していたほどであった⁵²⁾。

こうしてさまざまな要因が重なって、平山政十が1931年に製作した日本映画が、1940年のスペインで上映される運びとなったのである⁵³⁾。

日本映画『殉教血史日本二十六聖人』のマドリードにおける上映

フランコ独裁体制下での1940年12月1日、日曜日の午前中に、マドリードの「パラシオ・デ・ラ・ムシカ」⁵⁴⁾において映画上映会が開かれた。この時の『殉教血史日本二十六聖人』のスペイン語タイトルは“Sangre en el Japón”（日本における血）であった⁵⁵⁾。ドメンザイン神父は上映前の講演で、ピウス10世によって列聖された日本の二十六聖人のあゆみを話すとともに、異教徒ばかりの日本でローマ・カトリック教の宣教活動を行うことがいかに重要であるかを説き、壇上からカトリック国スペインと日本のあいだの物質的・精神的協力の必要性を訴えたのであった。その日の観客は大変熱心にこの映画を鑑賞したと報告されている。また日刊紙ABCは、映画撮影後には出演者皆がキリスト教の信仰を持つようになったとドメンザイン神父が述べたと伝える。実際のドメ

52) Amado VILLON: *Cincuenta años por el Japón*, Madrid, Pro Fides, 1936. (Traductor, Moisés Domenzain. El título original: *Cinquante ans d'apostolat au Japon*.)

53) 上映会では「近代日本を賞賛すること」が求められたようである。ロダオ、フロレンティーノ『フランコと大日本帝国』晶文社、2012年、p. 57.

54) パラシオ・デ・ラ・ムシカ（音楽の宮殿）は、マドリードの中心部グランビア通りに面した大規模映画館であった。本稿執筆中の2015年1月現在、映画館としては使用されていない。建物の全体的な改築のための覆いがかけられており、今後の建物の使用用途は不明である。

55) “Sangre Japonesa y las misiones”, en ABC (Edición Madrid), 3 diciembre 1940, p. 10.

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる
ンザイン神父の講演内容についての詳細は不明であるが、少なくともこの記事
は、日本ではローマ・カトリック教の信徒となりスペイン人と同じ、「本当の」
信仰をもつ人間、信頼するに足る人間が極東の地に生まれつつあると印象づけ
る契機として上映会を位置づけた⁵⁶⁾。

既に内戦下で、映画の検閲は始まっていた。フランコ陣営内では、1938年4
月には内務省宣伝局に国民映画部が設置され、同年11月の省令で検閲規則が定
められた⁵⁷⁾。そして内戦後には、統一ファランヘ党によるナショナル・サンジ
カリズムを標榜する人々とカトリック教会の指導に従いカトリック性を追い求
める人々は、体制内の支配的グループとして、メディア検閲部署における指導
権をめぐる権力闘争を繰り返して⁵⁸⁾。フランコ独裁体制初期は特にナチス・
ドイツの宣伝活動に強い影響を受けながら、メディアへの検閲が遂行され、ど
の映画の前にも必ず上映される体制翼賛的なニュースやドキュメンタリーの制
作・配信をおこなうNO-DO社を設置しようとしていた時期にあたる⁵⁹⁾。大衆
に対する映画の影響力を認めるフランコ体制は、思想統制を強化して、映画関
連機関を指導・監督しようとしたのであった⁶⁰⁾。よって1940年12月にマド
リードで日本映画『殉教血史日本二十六聖人』が上映された時期は、1937年の
検閲法が適用されつつ⁶¹⁾、「新国家」のもとで検閲システムが整備されていく
過渡期と考えられる。

そのような状況下で、フランコ体制にとってこの日本映画は、絶対的存在へ
の従順による殉教という「普遍的」美德を描いている点で、上映に値する作品
であった。カトリック的な伝統主義からみれば、殉教は当然尊重されるべき出

56) Ibid.

57) Magí CRUSELLS: *La Guerra Civil española. Cine y propaganda*, Barcelona, Ariel, 2003, p. 82.

58) Rosa ÁLVAREZ BERCIANO, Ramón SALA NOGUER: *El cine en la zona nacional, 1936-1939*, Bilbao, Ediciones Mensajero, 2000, p. 26.

59) 1942年11月設立。Emeterio DIEZ PUERTAS: *Historia social del cine en España*, Madrid, Editorial Fundamentos, 2003, p. 134.

60) 乾英一郎『スペイン映画史』芳賀書店、1992年、pp. 87-89.

61) Emeterio DIEZ PUERTAS: *op.cit.*, p. 254.

来事である。また統一され唯一党となったファランヘ党からみれば、殉教者というカテゴリーは内戦で死亡した自らの内なる死者を思い起し称揚することにつながる重みを持っていた。双方の利益の相乗効果により、この映画が事前検閲で上映を拒否されることはなかった。とはいえ、当時は、メディアによる宣伝活動はヒトラー政権のプロパガンダを模して行うべきとする意見も根強く、過剰な宗教的ニュアンスがあるものを避けようとしていた様子もみられる⁶²⁾。

映画がどのような検閲プロセスを経て上映に至ったのか、これまでのところでは明らかになっていない。ただし、前述した政治グループ同士の権力闘争の影響があつてのことかどうかは不明ではあるが、1940年12月のマドリードでは一日のみの上映で、長期にわたっての公開ではなかったことから、あくまで自主上映会の域から出なかったことに間違いはないだろう⁶³⁾。また現在までのところで、この1940年12月1日午前中の上映回をのぞき、1940年代にスペインのその他の場所でこの映画が上映されたことを証明する資料は見つかっていない。

わかっているのは、その後10年余りの時を経て、この映画は1953年のスペインで再び上映されたということである。バスク現代芸術センター (Arte Garaikideko Euskal Zentro-Museoa / Centro-Museo Vasco del Arte Contemporáneo) のデータベースによると、1953年に現在のバスク自治州の州都ビルリアにあったテアトロ・フロリダで上映されたと記録されている⁶⁴⁾。実はこの年はローマ教皇庁との政教条約 (コンコンルダート) が締結された年であり、「ナショナル・カトリシスモ」が頂点を迎えた時期のことであった。この頃には第二次世界大戦における枢軸国敗北を受けて、国家の全体主義的イデオロギーではなくカトリック性の擁護を基調とする検閲が行われていた。こうして16世紀末

62) Vicente SÁNCHEZ-BIOSCA: *Cine y guerra civil española. Del mito a la memoria*, Madrid, Alianza Editorial, 2006, pp. 40–41.

63) 上映翌日の12月2日に関しては新聞休刊日であるため不明であるが、3日の新聞の映画欄からは同日の「パラシオ・デ・ラ・ムシカ」では、「ルイ・パスツールの悲劇 (“La Tragedia de Louis Pasteur”)」というタイトルの、別の映画が上映されていたことがわかる。“Cartelera Madrileña” en *ABC* (Edición Madrid), 3 diciembre 1940, p. 11.

64) <http://catalogo.artium.org/sangre-en-el-japon>

フランコ独裁体制下のスペインにおける日本映画『殉教血史日本二十六聖人』の上映をめぐる
の日本でおきた殉教事件を描いた映画は、1940年の頃とは異なる文脈で1950
年代のスペインの人々に鑑賞されたのであった。

おわりに

現在のような形でのメディア・コミュニケーションがまったくの未発達で
あった時代に、結果として、ドメンザイン神父は日本での司牧活動に熱意を注
ぐ一方、ローマ・カトリックの宣教活動を通じて、スペイン的な文化事象を日
本に伝えた。と同時に、日本に特質的なものであると彼が感じた文化事象を、
祖国スペインの人々に知らしめる情報提供者の役割をも果たした⁶⁵⁾。映画はそ
のための手段の一つであった。

映画を利用する側の意図は、映画を製作する側の意図とは別に存在する。ド
メンザイン神父自身、宣教活動において使用するツールとしての映画の重要性
を認めていた。しかしながら、スペインにおいて日本文化を伝えるために『殉
教血史日本二十六聖人』という映画を用いたドメンザイン神父ですら、おそら
く、平山政十が映画に込めた愛国的な意図を読み取ることはなかったと思
われる。

実は現代の日本でも『殉教血史日本二十六聖人』は上映されている。「日本ス
페인交流 400 周年」の企画については既に述べたとおりだが、その他にも、
たとえば、2014年10月26日には岩手県立美術館で上映されたことが確認でき
る。これは、日本二十六聖人記念碑を制作した彫刻家舟越保武の展覧会「まな
ぎしのむこうに」を補完するための上映会であった⁶⁶⁾。そこには、制作当時平

65) ドメンザイン神父が執筆した日本文化に関する著作は以下のとおりである。
Moisés DOMENZAIN: *El Japón. Su evolución, cultura, religiones*, Bilbao, El Siglo de
las Misiones, 1942. なお本書には、1940年からスペイン公使を務めた須磨弥吉郎が
プロローグを記した。なお、ルイス・フォンテス神父の例にみられるように、この
本に影響されて宣教師の道を選んだと自己を顧みる人も多い。フォンテス神父につ
いては、以下のURLを参照されたい。<http://www.agenciasic.com/2014/06/04/padre-luis-fontes-lo-mas-difícil-en-japon-es-crear-precedente-lo-que-no-existe-es-muy-difícil-de-implantar/>

66) http://www.ima.or.jp/ja/exhibition/temporary/details/1408-2014_ex04.html

山政十が観客に汲み取らせたかった映写の意図とも、1940年にドメンザインがスペインでこの映画の上映を実現させた折の期待とも別の、全く異なる上映企画者の側の映写理由をみいだすことが出来るのである⁶⁷⁾。

67) 彫刻家舟越保武は1912年岩手生まれ。長男が生後間もなく急死したのを機にカトリックの洗礼を受けた。高さ5.6メートル幅17メートルの「二十六聖人記念碑」のうち、舟越の手による人物の部分はブロンズ製である。隣接する日本二十六聖人記念館・聖フィリポ教会を建てた建築家今井兼次が同記念碑の台座部分を制作した。長崎文献社編『長崎遊学 8: 「日本二十六聖人記念館」の祈り』長崎文献社、2012年、pp. 64-71.

本研究はJSPS科研費24510356による研究成果の一部である。